

6) アシビ=馬酔木

アシビはツツジ科の常緑低木で本州、四国、九州の山地に自生する。高さは3mほどで、葉には『アセボトキシン』(asebotoxin)という有毒物質を含んでおり、木の葉を食べた馬が酔ったような足取りになったことから、この名前が生まれたといわれている。したがってもとは『足癩』(アシジヒ=癩<ハイ>は不治の病のことで、病気などで不自由な身体になることをいう差別的な用語。ここでは足が不自由になることを意味している。)といわれていたが、これが詰まってアシビになったという。また『足撓』(アシダミ=撓<ダウ>はタワムもしくは弱ることを意味しており、ここでは足が弱くなるという意味。)が転じたもの、などともいわれている。東北地方では『チョウチンバナ』ともいわれ、これは花の形が「提灯」に似るところからの呼称であろう。地方によっては『シカクワズ』だとか『ウマクワズ』などというところもある。これも葉に含まれる毒性に由来している。江戸時代の奥武蔵では暗い山路を歩くときには、この木の枝を腰に着けて行くと、オオカミやイノシシなどに襲われないと考えられていた。またアシビをヨーロッパに紹介したのはスウェーデンのツェンペリーで、1784年に刊行された『日本植物誌』の中で『シシクワズ』としている。これは長崎の方言で、鹿をシシといったためイノシシの意味ではない。

学名は『*Pieris japonica*』で、属名の『*Pieris*』はギリシャ神話の『*Muse*』(ムーサ)が生まれたところの地名である。『*Muse*』は音楽 music の語源で文芸、美術、音楽、舞踊などをつかさどる9人姉妹の女神である。彼女達はゼウスとムネモシネ(記憶の女神)とのあいだに生まれた姉妹で、詩人や楽人に閃きを与えてくれる反面、おごれるものたちに対しては厳しく処罰することもたびたびだった。マケドニアの王ピエロスの娘で歌自慢の9人姉妹が女神達に挑戦をいどんだとき、この9姉妹を負かした上に彼女達を、罰としておしゃべりな鵲(カササギ)に変えてしまったと伝えられている。イギリスではアシビのことを、『*Japanese andromeda*』と呼んでいる。『*Andromeda*』(アンドロメダ)は星座の名前でもあるが、ギリシャ神話ではエチオピアの王であるケフェウスとカッシオペイアの娘である。母のカッシオペイアが、こともあろうにポセイドンの娘であるネレイスよりも、アンドロメダの方が美しいと言ったために、ポセイドンの怒りをかってしまい、ポセイドンはエチオピアに怪物を送り込んだ。ケフェウスは困り果ててアンモンの神に問うと、「アンドロメダを海神の生け贄として捧げれば、国は救われる」と告げたために、彼女は海辺の岩に縛られてしまう。これを助けてアンドロメダと結婚したのが、当時の英雄ペルセウスであった。彼女はペルセウスとギリシャに暮らし、死後は両親のケフェウス、カッシオペイア、それに夫のペルセウスとともに星になったと伝えられている。

『万葉集』では馬酔木の名が見える歌が、10種ほど詠まれている。

磯の上(エ)に生(オ)ふる馬酔木を手折らめど 見すべき君がありといわなくに

は特に有名で、**大伯皇女(オオクノヒメミコ)**の作と伝えられている。彼女はこの歌を弟である**大津皇子(オオツノミコ)**に捧げたのである。ともに天武天皇の子にあたり、母は**天智天皇**の皇女である大田皇女(オオタノヒメミコ)であった。母親が早く亡くなったために13~26歳までを伊勢神宮の斎宮として仕え、**天武天皇**が亡くなると斎宮の任を解かれるものの、弟である**大津皇子**の謀反事件に巻き込まれてしまう。これは草壁皇子(**大津皇子**の異母兄弟=02-01-01-1 ツツジの項を参照)に対する謀反で、草壁皇子とその**母鸕野皇女(ウノノヒメミコ=後の持統天皇)**との陰謀だったともいわれている。この乱は『壬申の乱』(672年)後の政争に終止符を打つもので、**持統側**が勝利する結果となったが、草壁皇子はその後間もなく急逝し、天皇になることはなかった。

この壬申の乱とその直後の歴史を紐解いてみると、当時の複雑な家族関係と姻戚関係、さらには異常なまでの権力への執着が浮上してくる。まず壬申の乱は、表面的には**天智天皇**の皇太子だった『大友皇子』と**天智天皇**の弟だった『大海人皇子』の後継争いであった。671年11月、**天智天皇**は自分の余命が短いことを悟ると、自身の皇子である**大友皇子**を太政大臣に付けて、次帝にすべく準備を始める。他方、皇太子の地位にあった**大海人皇子**は**大友皇子**を皇太子に推挙して、自分は出家する意思があることを**天智天皇**に申し出ると、天皇はこれを受け入れ、**大海人皇子**は吉野宮に下った。本来であればこれで丸く収まるはずである。しかしこれは**大海人皇子**の策略で、彼にはこのまま隠遁する気などまるでなかった。密かに反転の期を窺っていたのである。翌672年1月**天智天皇**は近江宮において46歳で没すると、**大友皇子**が後を継いだ。彼は弱冠24歳の若さで、取り巻きも多くはなかった。ここに目をつけた**大海人皇子**は吉野を出立すると、まず伊賀国へ行き、伊勢国を經由して美濃へ入った。ここで彼は東国武士を味方につけることに成功したのである。**天智天皇**が取った急激な改革は地方豪族をないがしろにする点多かったため、諸侯はいち早く**大海人皇子**に従ったからである。そこで**大海人皇子**は都があった近江と、最重要拠点である大和へと兵を二分して送り出したのである。一方、**大友皇子**は吉備と筑紫に兵力を求めたが、現地の総領はこれに動ぜず、結局近隣諸国の兵力しか集めることしか出来なかった。この時点ですでに**近江朝側**には勝ち目は乏しかった。初期の戦闘は熾烈なものとなったが、672年8月23日瀬田橋(滋賀県大津市唐橋町)の戦いで、**近江朝廷軍**は大敗を喫し、翌24日**大友皇子**は自決してこの乱は終結した。そして673年2月、**大海人皇子**は『飛鳥浄御原宮』に遷都して、**天武天皇**として即位したのである。

彼は即位するとまず論功行賞を行い、戦後の秩序を回復するために、『飛鳥浄御原令』を制定し、さらには律令国家の早期確率を目指して、**天智天皇**が遣り残した中央集権体制の強化を推し進めた。その一方では皇親政治の徹底を図り、太政官と大弁官を並立させる一方、大臣は一人も置かず、権力を天皇に集中させることに腐心した。また新官位制を施行するとともに、地方の支配体制を明確にするために諸国の境界線

を定めて、地方の支配にも配慮した。さらに晩年には『八色の姓』を制定して朝廷の身分秩序を確立するとともに『冠位四十八階』を制定し、日本最古の貨幣である『富本銭』を鑄造するなど、中央集権を強力に推し進めたのである。

天武天皇の治世で注目すべきは『日本書紀』の編纂である。息子の『舎人親王』に命じて正史としての『紀』を遺し、事実をゆがめた。つまり「次期天皇と目されていた『大海人皇子』に対して『大友皇子』が反乱を起こしたが鎮圧された」と記述させたのである。しかしこれは自らの王位の正当性を主張せんがためとの見方もあり、『日本書紀』における『天武』の事跡は誇張されている部分があるとの厳しい指摘もある。またこれまでの日本史には天皇と言う呼称はなく大王であったが、天武は天皇と言う呼称に改めるよう命じた。この観点からすれば天武こそ初代天皇と言うことになる。さらに天武天皇は宗教的な権威を高めるために大官大寺の造営を進め、皇后(後の持統天皇)の病の平癒を祈願して薬師寺(現存の薬師寺ではない)を建立する一方、伊勢神宮の祭祀を重要視して、齋宮を制度化、自分の娘である大伯皇女を伊勢神宮の齋宮として仕えさせたのである。

この他注目すべきは肉食の禁止である。即位後間もない天武4年(675年)『肉食禁止令』を出し4月1日から9月30日までの半年間、稚魚の保護のためと称して肉食を禁じ、合わせてウシ、ウマ、イヌ、サル、ニワトリの5蓄の肉食を禁止した。

では『壬申の乱』の背景とはいかなるものだったのだろうか。大きなポイントが4つある。その一つは百済の復興のために朝鮮半島へ出兵するものの、『白村江の戦』に大敗を喫したために、今度は玄界灘を中心に防備を強化せざるを得なくなり、費用がかさんだ事。二つ目はさらに都を奈良盆地の飛鳥から琵琶湖畔の近江に遷都したが、こうした国内の改革を急ぐあまり、豪族や民衆に新たな負担を課することとなり、不満が高まって、豪族、特に東国を中心に民心が離れたこと。3つ目が今までの同母兄弟間の皇位継承を廃して唐を見習った嫡子相属性を志向したために大海人皇子の不満を煽らせる結果になったこと。最後が『額田王』(06-03-01 参照)をめぐる天智・天武の争いが、深層に沈殿していたことなど、4つの問題点を上げることが出来る。

しかしこの日本古代史上最大の内乱が終わり14年後の686年10月、天武天皇が55歳で崩御すると(天武の年齢は色々な説があって定かではない)、新たに後継者問題が発生する。685年ごろから天皇は病気がちであったため、「天下の事は大小を問わずことごとく皇后及び皇太子に報告せよ」と勅し、『持統天皇』・『草壁皇子』が共同で政務を執るようになっていたが、皇太子の『草壁皇子』よりも『大津皇子』の方が実力に勝り、一般の受けもよかった。『懐風藻』によれば「度量広大で博識にして、また音声も明瞭で風貌もたくましく、文武に優れ、漢詩文を得意としていた」と言う。高貴な身分でありながら奢るところもまったくなく、人を厚く礼遇し人望も極めて篤かった、そのことが逆に彼のその後の運命を決定付けたのである。天武亡き後、最高権力者になった皇后鸕野皇女(ウノノヒメミコ)にとって気がかりな存在になったのである。

679年、天武は吉野の御幸に際して、皇后鸕野皇女と、草壁皇子、大津皇子、川島皇子、高市皇子、忍壁皇子、芝基皇子と4人の息子と2人の甥(天智天皇の子)の6人の皇子たちを集めて、天武は皇子たちに互いに争わずに協力すること誓わせた。これが『吉野の盟約』であったが、これを真っ先に破ったのが皇后鸕野皇女だった。彼女は自分の息子を天皇位に付けたいがために、草壁皇子と結託して大津皇子を亡き者にせんと、謀反の嫌疑をかけて抹殺する。しかしこれは『大津皇子』と莫逆(バクギャク)の契りを交わした『川島皇子』が大津皇子の言葉尻を捕らえて謀反の密告をしたことによるとも言われている。それはともかくこうした持統天皇(鸕野皇女ウノノヒメミコ)の深慮にもかかわらず、草壁皇子は689年4月27歳の若さで急逝し、天皇になることはかなわなかった。そんな乱世にあつて大伯皇女は、弟を気にかけていたのである。

我が背子(ヒ)を大和へ遣(ヤ)るとさ夜ふけて 暁(アカサ)露に我が立ち濡れてし
これは弟の大津皇子が伊勢に訪ねて来たおり、都に帰る弟の身を案じて歌ったものである。しかしその大津皇子は686年10月2日に30余人の謀反の首謀者として逮捕され、翌3日には大和国の訳語田(オキタ)の家で死を賜った。そして后(キサキ)の山辺皇女(ヤマベノヒメミコ)も後を追って殉死した。大津皇子の時世の歌は

百伝(ヒツツタ)う盤余(イロ)の池に鳴く鴨を 今日のみ見てや雲隠りなむ
で、大津皇子の亡骸は『二上山』(フタガミヤマ=奈良県北葛城群)の男岳の頂上に葬られた。大伯皇女は弟の死を嘆いて、次のように歌っている。

うつそみの人なる我や明日よりは 二上山を弟(イヒ)と我が見む
この二人の歌にまつわる物語は、古代史の悲劇としてあまりにも有名である。

さて『馬酔木』は明治時代の短歌雑誌で、明治36年6月(1903年)に創刊されて、伊藤左千夫、長塚節などが編集にあたり、全32冊が刊行された。その求めるところは正岡子規の遺業を受け継ぎ、写実と万葉主義を主唱しようというものであった。この考え方はやがて島木赤彦や、斎藤茂吉などに受け継がれて、大正時代になると『アララギ』として大きく開花する。一方昭和時代には同名の俳句雑誌があった。これは1928年7月に創刊され、翌年から水原秋桜子が主宰し、人間の感情や個性を主張して行こうとするもので、感情を抑制し写生に徹しようとする『ホトトギス』と好対照の存在となった。当時の写生句に飽き足りない人々の強い支持を受けて、俳句の革新運動の拠点となって、石田波郷(01-07-08-17)などもここで活躍した。

馬酔木は材としての利用価値も高い。材は堅く挽き物細工やパイプなどとしても広く用いられた。しかしこの木の価値は殺虫剤としての利用であろう。かつては馬酔木の葉を煎じて、家畜の寄生虫駆除や殺虫剤として使っていたのである。

馬酔木はあまり花屋さんでは売られていない。最近ではピンクの花の咲くものが改良され、こちらの方がむしろよく見かける。外国で改良されたバレンタインという品種は濃桃色の花で特に美しく人目を引く。



アシビ、有毒植物のせい、それとも紅花種や、カルミアが普及してきたせい、最近ではあまり見られなくなりました。



紅花のアシビ、最近ではむしろ紅花の方を多く見るようになった。

[目次に戻る](#)